

すっかり朝。マンションに戻ってきたハンニバルおよび、暇なのでハンニバルについて来たスタングが見たのは、朝もはやから忙しそうにしているマンションの人々とAチームの皆さん。それも、ジェイソンの部屋（シーツ干したまま&散らかったまま）で。

「行ってきます！」

と、トーストを銜えて飛び出していくのは、エリート・サラリーマン、クツワダ氏。

「誰かオリバー見なかった？」

そう聞いて回っているのは、マリアン。オリバーがいないことに、やっと気づいたようだ。だが、その手には、皿一杯のフレンチトーストとスクランブルエッグ。

「うちのユリアもいないんだ！」

なぜかフリオもこの朝食会に参加している。

「ちよつと旦那、あんた奥さん残して何してんのよ？」

アントワネット嬢も、頭にカーラーを巻いたまま、紅茶を啜っている。

コングとハイデン氏は、フェイスマンの手による資材リストを見つめながら、シリアルを食べている。二人の後ろには、古めかしい機械がガービザザと音を立てている。

キムはエヴェレット氏に問診しながら、ヨーグルトを食べている。因みに、キムは夜勤明けで、この後、寝る予定。

「背中から腰にかけて痛くて堪らないんだ。あと、頭もクラクラする。」

「そんなの、頭痛薬を十二錠飲んで、湿布貼って、寝れば治るわよ。」

マスナン爺さんは、ベランダで体操をしている。その横に見慣れぬ男がいて、彼も一緒に体操をしているんだが、誰だろうか？

「はいはい皆さん、フルーツですよ。」

キッチンから果物山盛りのトレイを持って、ミセス・ハイデンが姿を現した。それに群がる人々。ミセス・ハイデンは空になったトレイを手にキッチンに戻ると、別のトレイを持って再度現れた。

「コレードさん、奥さんのご飯、できましたよ。」

「あ、済みません。うちのユリア、見ませんでしたか？」

マリアンとこのオリバーもいないって話なんですけど。

「昨日は一緒にお夕飯を食べたけど、その後は……見なかったわねえ。見かけたら電話するわ。」

「お願いします。」

そんな混沌とした状態を外れ、ハンニバル（とスタング）はキッチンに向かった。そこでは、マードックがぐったりしていた。

「モンキー。」

「ああ、大佐、久しぶり。何か食べる？ その後ろの人も。」

力なく手を振って、マードックが尋ねる。

「そうだな、結構腹が減ってるんで、すぐさま二人前頼む。」

スタングの意見は無視。

「で、電話で話した件はどうなったかな？」

「コングちゃんとハイデンさんが管制塔の盗聴してくれている。やっぱ大佐の話通り、何かあったみたい。」

「何か、あった、つて？ エンジントラブルじゃなくて、か？」

「うん、エンジントラブルで二時間アンカレッジで足止め食らったのは、もう到着したろ？ その後の、今飛んでるやつ。俺様の勘じゃ、今日の夕方ぐらいに到着する便かな。」

ハンニバルとスタングは、顔を見合わせた。親分の乗っている便かもしれない。

「何か、つて、何だ？」

「わかんね。管制塔でも状況がよくわかんねえみてえよ。ともかく通信が途絶えてて、故障か何かかもしれないし、ハイジャックかもしれないし。オイラが知ってるのはそこまで。続きはコングちゃんに聞いてみて。」

話しながらも、てきばきと（だが全身ぐったりと）朝食を作っていくマードック。

「わかった。……フェイスはどうした？ 姿が見えないんだが。」

「寝てる。」

マードックの答えに、うむ、と頷いて、ハンニバルとスタングはリビングに向かった。

ハイジャック犯の一人に突進していったワゴンは、そこに積まれたものの重みで急速に加速していった。

一方、ワゴンに突進されつつあるハイジャック犯は、彼もまた乱気流に弄ばれている飛行機の中にいるわけだからして、体勢を崩していた。引つ繰り返る寸前と言っても過言ではない。シートに片手で掴まって、何とか持ち堪えている状態。さらに、偶然なのだが、彼はトイレに背を向けるようにして立っていた。つまり、彼はキ

ンケイド氏の存在に気づいてもいなければ、ワゴンが突進してきていることにも気づいていない。蛇足ながら、彼はダイナマイトを片手に持つてはいるものの、それは火の点いていないもので、全然危険ではない。誰かが火を点けない限りは。

ドシンツッ！ ガラガラガッシャーン！

ハイジャック犯の一人は、見事なまでに後ろからワゴンに突突され、倒れたところを走り続けるワゴンに轢かれ、加えて、後頭部にきつい一撃を食らわされた。その衝撃で、さらに前方へと飛んでいくワゴン上のあれこれ。

もちろん、紙ナプキンも遠くへ飛んでいってしまった。

ミスター・キンケイドはそのチャンス逃さなかった。床に這いつくばったまま、手近な席の人にそつと声をかける。シート、のポーズで。

「あの、済みません、ティッシュペーパーか何か、お持ちでしたらいただけませんか？」

声をかけられた若い婦人は、一瞬驚いたようだったが、この床に這いつくばった男の、人がよさそうな、しかし切迫したような顔を見て、すぐさま一袋のポケットティッシュを渡してくれた。

「ありがとうございます。」

ミスター・キンケイドはそれを受け取り、さかさかとトイレに戻った。砂漠の油田から油田へとビジネスシューズで歩き回るのが比べれば、こんな傾いた飛行機の中を匍匐前進するのなど、大したことはない。

「はい、ティッシュを貰ってきました。」

スットコドッコイの潜む個室にポケットティッシュを差し入れる。と、その時。

ガクン。

今度は機体が後方に傾いた。キンケイド氏は、トイレのドアに体を強かに打ちつけたが、横揺れがなかったおかげで、レストルームより後方にすっ飛んでしまう、という最悪の事態は免れた。

「ゴロゴロゴロゴロ！」

走る凶器、ワゴンが戻ってきた。そして、ワゴンの上に乗っていた諸々も、個々に戻ってきた。ダイナマイトも然り。ハイジャック犯は床にべったり倒れているので、そう大きくは移動していない。

ワゴンの活躍を目にし、「これは使えるかも」と思ったキンケイド氏は、戻ってきたワゴンを上手く捕まえ、ストッパーをかけた。幸い、揺れに対応するので手一杯のハイジャック犯たちは、ワゴンが止まったことなど見てもいなかった。

「よし！」

ストットコドッコイがトイレからババーンと出てきた。出てくるなりベルトを外し（なら外したままで出てくればいいのに）、靴を脱ぐ。そして、ジャケットの内ポケットからペンを三本取り出す。

「な、何してるんですか？」

「まあ見てなっぺ。」

ペンをカチツカチツと組み立て、ベルトから引き抜いたゴムを接続すると、簡易パチンコの出来上がり。ジャケットのポケットから出したピルケースを開け、その中に入っていた玉を、直接ポケットに入れる。

その後、ストットコドッコイはキンケイド氏に一本の万年筆を渡した。

「それ、キャップ取るとセラミックのナイフになってるから、念のため持っとうて。」

そして、靴を片方渡す。

「今から催眠ガス流すんで、これを口に当てて。」

「これって……靴ですよね？」

「酸素マスクでもあるんだ。踵んとこに液体酸素が入っててね。」

と、ストットコドッコイは胸ポケットから出した楊枝を、踵部分に空いた小さな穴の中に差し込んで、カツンと押しした。

「もう酸素出てるから。」

残る片方の靴の踵も、同じようにして楊枝で突つき、ストットコドッコイはその靴を口に当てると、靴紐を首の後ろで結んだ。キンケイド氏も、それに倣う。

続いてストットコドッコイは、どう見てもステイック糊でしかないものをポケットから出して、キャップを取った。そこに糊はなく、小さな穴だけがあった。その穴から、シューッと音がしている。

二人は、そのまま、じっと待っていた。

その頃、市立病院では、オリバーとユリアが眠りから覚めるところだった。話は、前夜遅くに遡る。

夜半も過ぎて病院に到着した時、ユリアは倒れる寸前だった。子供とは言え確実に五十ポンド以上はあるオリバーを背負ったまま、歩き続けること二時間と二十分。いくら体力自慢のユリアと言えど、既に限界を超えていた。

痛い足を引き摺り、市立病院への最後の曲がり角を曲がって、病院の明かりが見えた瞬間、気丈なユリアの脳裏に浮んだのは、最早、母でも父でも、生まれているはずの弟（もしくは妹）でもなく、一杯のソーダとハーシールのチョコレート、そして、トイレであった。

「オリバー、ほら見て、もうすぐよ。すぐそこが病院だわ。」

ユリアはオリバーに呼びかけた。ユリアの背中に張りついて、既に半眠り状態であったオリバーは、その声に、小さく「ああ」と反応しただけで、また眠りの淵へと落ちていった。ユリアは、そんなオリバーを背負い直すと、しっかりとした足取りで病院を目指すのであった。

ずんずん歩くユリアの目に、病院の玄関が見えてきた。夜中なのに、随分と人が多い。夜中の病院には来たことがないので、それが普通なのかそうでないのか判断はつかないが、とりあえず病院は夜中でもやっているようだ。

病院に着いたら、まずオリバーを下ろして、トイレを借りて、それからママのところへ行って……と、考えながら早足で玄関に駆け寄るユリアの腕を、ガツンと掴む者あり。

「ハッ！ と見上げるユリアの目に映ったのは、仁王立ちのキムだった。」

「後ろの子、随分重症みたいね。何を食べたの？」

「食べ、た？」

「夕飯よ！ さっさと答えなさい！」

「凄惨な形相でユリアに詰め寄るキム。」

「えっと、今日最後に食べたのは……。」

「必死で本日の記憶を手繰るユリア。」

「あ、そうだ、シュリンプ・ピラフを食べたわ。」

「シュリンプ・ピラフ？」

キムは渋い顔をした。

『シュリンプ・ピラフって、エビ炒飯のことよね。何て顔色……。後ろの子はもう意識すらないし、早く処置しなくっちゃ、大変だわ。』

「二人とも、即入院！」

「入院、って、ちよつと待ってよ、私はただ、ママのお見舞いに……。」

微かなユリアの抵抗は、当然のごとく無視され、両脇から現れた看護師たちに腕を取られ、病院の中に引き摺られていくユリアとオリバーであった。

かくして、無理矢理寝かされてブドウ糖点滴を受けた二人は、疲れもあり、翌朝八時までぐっすり熟睡してしまっただけであった。

緊急外来の食中毒患者たち全員に対応し終えた時、夜は明け始めていた。自分の仕事に一段落つけたキムは、一人の入院患者の個室を訪ねた。病院の朝は早いのである。

「ハ―イ、社長。具合はどう？」

「おお、キムか。今朝は随分調子がいいよ。この分なら、今週中には退院できそうだな。」

「そう、それはよかったわ。」

キムはそう言うと、ベッドの端にドスンと腰を下ろした。

「ア―ウ―！」

社長と呼ばれる男が叫んだ。

「あら、足踏んだ？ ごめんなさい。」

キムは、そう言うと、ちよつとだけ腰をずらした。

「はっはっはっ、いいんだいいんだ。ア―ニー君が、もう骨は繋がってるって言ってたし、本質的な障害はない。」

んだ。ただ、手術の傷跡が痛むだけで。」

そう言うって力なく微笑む社長、ええと、そろそろ名前を決めなきゃいけないな、その名をフレミングス氏と言う、は、見たところ五十絡み、血色のいい顔にプラチナブロードの口ヒゲを蓄えた、割とハンサムな壮年の男性である。

「で、どうしたんだ、今日は。」

「あのね、社長にお願ひがあるの。」

「お願ひ？ キムがおねだりなんて珍しいな。いいともいいとも、わしにできることなら、何でも聞いてやるよ。」

と、鼻の下を伸ばすフレミングス氏。どうやら、キムに惚れているらしい。

「社長の会社、ケーブルテレビ持ってたわよね？ 確か。」

「ん？ ああ、持ってるよ。うちの商品（海草を使った化粧品）のテレビ通販用のチャンネルだ。」

「そこで、ちょっとCMを流させてほしいの。」

「コマージュ？」

「ええ。ジェイソン・ヒックスって詩人、知ってる？ もしくは、『どうして？』っていう本。」

「知らん。わし、本は読まないからな。」

「知らないなら知らないでもいいんだけど、あのね、その人のファンの集いを開催することになったのね。で、テレビコマージュを流したいなあって。」

「構わんよ。ちょうど、もずく石鹸が完売して取り扱ひ商品が減ってる時だし。そうだな、三十秒のスポットを一日二十回程度なら、すぐに都合がつくよ。」

「三十秒ね、オッケー。ありがと社長、大好き、チュッ。」

キムは、大袈裟にフレミングス氏に抱きつき、頬にキスをする、元気よくベッドから下り立った。

「あ、そうだ、足ね、まだ骨くっついてないと思うわよ。座った時にメリッて言ったし。あとでアーニー君寄越すから、一回レントゲン撮ってみてよね。じゃ、バイイ。」

キムは、そう言い捨てると、意気揚々と部屋を出た。

舞台は、ジェイソン宅での朝食会に戻る。

キウイを五個食べて満足した夜勤明けのキムは、椅子に座ったまま大きく伸びをした。「さあて、寝るわよー」と思いながら。

と、そこへ、マリアンがオレンジ山盛りの皿を片手に近寄ってきた。

「ねえ、キム。オリバー見なかった？」

「オリバー？ そう言えば見てないわね。」

いや、見たんだけど、気づいていないだけ。何せあの時、オリバーの顔はユリアの髪で隠れていたし、キムはキムで慌てていたし。まさかオリバーとユリアが中華料理店の食中毒者の列に混じっているとは思っていなかったし。加えて、キムとユリアはあの時、初対面だったし。

「じゃ、私、寝るわ。おやすみ。」

唯一、子供たちの行方の鍵を握っていたキムが、自分の部屋に帰ってしまった。もうこの場の誰も、二人の行方を知らない。さあ、どうする、マリアン（&フリオ）。

朝八時。市立病院の小児病棟のベッドの上で、オリバーとユリアは目覚めた。疲れも残っておらず、快適な目覚め。その直後、一瞬、ここがどこなのかわからなかったが、ユリアはオリバーの姿を見て、オリバーはユリアの姿を見て、ここは病院なのだ、と思い出した。

既に点滴は外されていて、幸い辺りに看護師の姿も見えない。二人は無言で頷き合うと、ベッドから下りて、オリバーはスニーカーを、ユリアはサンダルを履いた。ありがたいことに、ユリアの靴擦れは治療されていて、サンダルを履いても、もう痛くはなかった。

エレベーターの前で、院内案内を見上げながら、二人は困ってしまった。そこに書かれていることが、どれもこれも二人には理解できない単語だったからだ。図の形からして、これが病院の中どこに何があるのかを示しているものだということがわかるのだが、それ以上のことがわからない。

「そうだ、ユリア。受付に行って聞いてみればいいよ。」

オリバーの意見に、ユリアは頷いて、下向き三角のボタンを押した。受付が一階にあって、一階に行くには下向き三角のボタンを押せばいい、ということとは、聡明な

ユリアには何となくわかっていった。

エレベーターで一階に到着した二人は、今度は一階にあるカウンターの一体どこが受付なのかわからずに困っていた。因みに、この病院、結構な大病院なので、初診受付と普通の受付と薬のみの受付と支払い窓口とその他諸々のカウンターがある。だが幸い、この時間（受付開始前）、待合室にいる人の数も少なく、人のいる窓口も少ない。

ユリアは、とにかく人のいるカウンターの方へ歩いていった。追うようにして、小走りですれに続くオリバー。「あの、済みません。」

「はい？」

受付の後ろのデスクにいた女性は、椅子から立ち上がって、カウンターの向こうのユリアを見下ろした。

「何かご用かしら？」

「あの、ガブリエラ・コレードはどこにいますか？」

「お見舞い？」

そう聞きながら、彼女はファイルを捲った。

「そうです。ママのお見舞いに来たんです。」

「ホントはお見舞いは午前十時から午後五時までの間だけなんですけど、せっかく来てくれたんだから、特別に……って、あら？ お母さんのお名前、もう一度教えてくれる？」

「ガブリエラ・コレード。」

綴りがわかるように、ユリアははつきりと発音した。「……お母さん、ガブリエラ・コレードさんね、昨日の夜に退院してお家に戻ってるわよ。」

「え？」

ユリアはその場で固まった。

「ええ？」

後ろで話を聞いていたオリバーも固まった。

コレード家の電話が鳴り出した。しかし、フリオもガブリエラも、在宅しているのだが、電話に出る余裕はなかった。と言うのも、ガブリエラが遂に破水したからだ。「どどどどどどどうしよう？」

あたふたしまくるのみのフリオに、気丈にガブリエラが言う。

「あのお婆ちゃんに電話して！」

「わわわわわかった！」

と、電話のところに駆け寄ったフリオだが、現在ベルが鳴り続けているので余計に慌ててしまった。

「何か鳴ってる！」

どうすればいいか、回っていない頭で考えた。そうだ、受話器を取ればいい。考えた通りに、フリオは受話器を取り、そして受話器を戻し、再度受話器を取って、マドモアゼル・アントワネットに電話をかけた。が、何度コールしても誰も出ない。そう、マドモアゼルはまだジェイソン宅でまったりしているのである。

フリオは受話器を放り出し、ガブリエラのいる寝室に向かって「ちょっと待っていてくれ！」と言いい残して、外に駆け出していった。

『待てるわけではないでしょ、馬鹿。』

産みの苦しみの中、ガブリエラはそう思った。

「おかしいわね、電話、切れちゃったわ。その後、ずっと話し中だし。」

親切にもコレード家に電話してくれた受付嬢が、ユリアに言った。

「でも、話し中ということは、お家に誰かいるってことよ。きっと、お父さんとお母さんじゃない？」

「多分、そうだと思います。」

「きっと僕たち、腹違いになっちゃったんだよ。」

後ろからオリバーが口を挟んだ。

「腹違い？ 行き違い、のことかしら？」

笑いを堪えているような口許の受付嬢。

「そう、それ。行き違い。」

オリバーが、こくこくと頷く。

「とにかく帰りましょう、オリバー。」

「うん、帰ろう。」

二人は受付嬢に礼を言うと、病院の外に出て、そして、マンションへ向かって歩き始めた。

マドモアゼル・アントワネットは、朝食後の一休みを満喫していた。何もなければ昼食まで一休みするのが彼女の日課だ。

彼女はジェイソン宅のリビングをすっかり気に入っていた。少々賑やかで、おまけにシートが干しっ放しなのに目を瞑れば、なかなか快適な場所だった。

何と言っても、三十分置きにマードックがお茶を煎れ直してくれるのだ。座っていればお茶が出てくるなどということは、長い彼女の人生でもそうそうない待遇だった。

『これで給仕してくれるのがもうちょっと若いイケメンだったら申し分ないんだけど……：：：そうそう、格好もちゃんとギャルソんで。』

マドモアゼルの優雅な空想を破ったのは、駆け込んだきたフリオだった。

「よかった！ ここにいた！ 大変だ！ 生まれそやなんだ！」

マドモアゼルの顔を見るなり、フリオは酸欠の金魚のように口をばくばくさせ、手足をばたつかせながら訴えた。

「あら、破水したの？」

のんびりと確認するマドモアゼル・アントワネットに、フリオはぶんぶんと首を縦に振る。

「まあ、少し落ち着きなさい。今行くから。」

よっこいしょ、とマドモアゼルは立ち上がった。それから、フリオにきてきと指示を出す。

「キムをを起こしてきてちょうだい。お湯は沸いているの？」

「そ、その前に水を……。」

腰が抜けた状態のフリオに、キッチンからマードックが水を持ってくる。よほど慌てて駆けてきたのだろう。そして、マドモアゼルの顔を見て安心したに違いない。

「まったく、ヘタレだね。肝心な時に役に立ちやしない。」

腰に手を当ててフリオを見下ろしたマドモアゼルは、大仰な溜息と共に傍らのマリアンを振り返った。

「マリアン、代わりに手伝ってちょうだい。」

マリアンはちょうどオレンジを食べ終わったところだった。

彼女はオレンジを食べたら、オリバー（とユリア）を本格的に探しに行くつもりだった。だが、眼前の事態は明らかにそれより逼迫している。

「わかったわ。とりあえずキムを起こしてくる。」

指についたオレンジの果汁をテーブルクロスで拭きながら、マリアンは立ち上がった。

実際、夜勤明けのキムを起こせるのは、マンション広しといえども、マリアンとジェイソンくらいなのだ。ヘタレなフリオには任せておけないだろう。

ジェイソン宅のリビングの一角で、そんな慌しいやり取りがなされている一方、リビングの別の一角には、黙々と朝食を取るハンニバルと、そして成り行きでここまで着いてきちゃったストコドコイの部下、スタングの姿があった。調理・給仕役のマードックも、手が空いている時にはリーダーの許にいる。

「しかしアレだ、久し振りだな、こんな忙しさは。ベトナム以来じゃないか？」

黄身三つ＋白身四つ分のスクランブルエッグを食みながら、ハンニバルが言った。庭ではチチチと小鳥の音がする。各人が疲労困憊していることを勘案しなければ、実に爽やかな朝だ。

「そうだね、俺様、この数日で随分アピリティが上がった気がするよ。特に家事の。ほら、見てよ、この箸捌き。」

と、小皿に置かれた生卵の黄身を箸でつまんで持ち上げて見せるマードック。それは、スキルと言うよりは、卵の新鮮さにポイントがあるのでは。

「いやはや、お見事。」

ハンニバルは、一旦フォークを置いて、マードックに拍手を贈った。すっかり糖分を使い果たして回りが遅くなっているハンニバル頭のCPUは、マードックの小技を単純に「すごい」と判断したようだ。それを見たスタング君、忌々しそうに舌打ちをする。

「ところで、あんたも朝食を食わないか？ 夕べから何も食ってないんじゃないだろう。」

先ほどから、食卓に着こうとせずイライラと室内を歩き回っている殊勝なストコドコイの部下に、ハンニバルが声をかけた。

「うるせえ。親分の乗ってる飛行機が非常事態かもしれねえ時に、のうのうと飯なんか食っていられるかよ。」

スタングさん、心の容量が狭めなのかしら。

と、そこに血相を変えて駆け込んだのは、別室(コング&マードック用寝室)で管制塔の通信傍受に精を出していたコング。

「大変だぜ、ハンニバル!」

「どうした、軍曹。」

「あんたの言つてた飛行機な、どうやらハイジャックされたらしいぜ。」

「何?」

「何だと?」

「何だつてえええつ!」

「一際大きく反応したのはスタング。」

「そ、それじゃ、親分……。畜生、こうしちゃいらねえ!」

と言うや否や、スタングは、凄い勢いで部屋を飛び出していった。

「……行っちゃったよ。」

「どうするつもりなんだ?」

「知らん。(→冷たい。)で、コング、ハイジャックされたつてのは本当なのか?」

「ああ、こつちへ来てくれ。」

コングに促されて、別室に向かうハンニバルとマードック。

別室では、愛妻作のホットドックを齧りながら無線傍受を続けるハイデン氏の姿が。

「何かわかったのか?」

「ああ、これを聞いてくれ。」

ハイデン氏は、通信機のヘッドホンのジャックを抜き、ポリウムを上げた。

微かに、歌のような音が聞こえてくる。

『ガガガ、チュルチュルチュル(周波数を調整する音)……♪おお、ち・きゅう、は、はーなるーだーいちー。ペンギンの故郷くくージラーのくねーどこー……ジジジ(→通信感度が悪い)……ラッコもくく吼えるよ、……神のく怒りくか・も・ねー♪』

「……何だこりゃ?」

ハンニバルが、心から問うた。

「まあ、続きを聞いてくれ。とんでもないぞ、こりゃあ。」
すっかり困った表情になったハイデン氏がツマミを

調節しながら言った。

『ガガガ……(BGMでうっすら曲は続いております)えー、皆さん、管制所の皆さん? 管制所でいいんだっけ? あの、飛行機に何か言う場所。塔? 塔? ……えー、塔の皆さん。僕ら、マザー・アース友の会って言います。わけあつて、アブダビ発……何便だっけ? 何便? 何便? え? そんな大きい数字言われてもわかんないよ!(怒)……まあいいや、この飛行機をジャックしています。つて言うか、貰っちゃってますう? みたいな……』

「……こいつは、馬鹿だな。」

コングが呟いた。

「ああ、そうらしい。しかし、ハイジャック犯だ。」

「始末が悪そうじゃな、馬鹿のハイジャックは。」

ハイデン氏の言葉に、黙つて頷く三人であつた。

スタングはジェイソン宅を出ると、玄関に向かつて走つていった。ゲイトをくぐり、道に出て、どんどん走つていく。車がないから、走るしかない。急がないと、親分が……!」

そこで、はた、と気がついた。ハイジャック犯と親分

どちらが強いだろうか。何があるうとも、どこかに武器を隠している親分が、いくら飛行機の中だからと言つて丸腰になるはずがない。

「……心配するこたねえか……。」

むしろ心配すべきなのは、ハイジャック犯の方ではな

かろうか。いや、ここぞとばかりに一暴れするだろう親

分以外のすべての人々を心配すべきか。

足を止めて顔を上げると、坂の下の街の方から、見慣

れた車がやつて来た。

「おい! ヴォルフ!」

スタングは車道に走り出て手を振つた。車はスタング

の手前で緩やかに停まり、スタングよりいくらか小柄な

そしてやや細身な男が窓から顔を出した。

「よお、スタング。こんなとこで何してんだ? 親分を

迎えに行くとか言つてなかつたか?」

この男、ヴォルフ・ハバロフスキーは、スットコドッ

コイの部下の一人であり、このところスタングと共に

マンションとその近辺の測量に明け暮れている。別に、趣味で測量をしているわけではなく、親分の命令なのだ。

「それがなあ、かくかくしかじか。」

スタングは同僚に事の次第を説明した。

「へえ、ハイジャックねえ。犯人も可哀相に。」

楽しそうに笑うヴォルフ。

「ハイジャックつて知ってるよ。ゲームでしょ。」

後部座席から子供の声が出て、スタングは声の方を覗き込んだ。

「違うぞ、坊主。ハイジャックつてのは、飛行機を乗っ取るんだ。ゲームのやつは、ブラックジャックじゃねえか?」

「何だ、このガキは?」

後ろのシートには、一人の少年と一人の少女とが座つ

ていた。言わずもがな、オリバーとユリアである。スタングとオリバー&ユリアは面識があることはあるんだ

が、夜中の一瞬の出会いだったため、互いに顔を覚えて

いないだけである。

「お前んちのガキ……じゃねえよな。」

「ああ、あのマンションの子だ。病院とこで困つてな、

マンションに帰りたいつてんで乗せてきた。」

「もしかすると、お前ら、オリバーとユリアか?」

「そうだよ、おじさん。僕がオリバーで、こちらがユ

リア。」

オリバーは紳士を気取つて、ユリアをスタングに紹介

した。

「母ちゃんたち、探してたぞ。……いや、探そうとして

るとこだったぞ。」

「パパとママはマンションにいましたか?」

そうスタングに聞いたのはユリア。

「親父さんはいたぞ。やたらと慌ててたけどな。何か生

まれそうだとか言つてたな。」

「赤ちゃんが生まれるんだ! 急がないと! ね、ユ

リア!」

「うん!」

「わかった! スタング、ちょっとここで待つてろ。」

「おう!」

ヴォルフはアクセルを踏み込み、車は、マンションま

であとちよつとの道程を全速力で走っていった。

『ええと、塔の人、聞いてます？ うわっ、今、すぐく揺れてるんで、何とかしてもらえませんかねえ。何？無理？ 乱気流だから？ 仕方ない？ 何それ？ 塔の人なら、何でもしてくれるんでしょ？ 無理？ そうじゃ、いいや。ええと、その、僕らマザー・アース友の会は、要求は何かって？ ちょっと黙っててよ、今言おうと思っただから。要求はですな、地球環境の保護です、当然。飛行機、飛んではまずよね？ これって、ガソリン使ってる上に二酸化炭素出してるじゃないですか。え？ ガソリンじゃないの？ マジで？ ガソリンじゃ飛行機飛ばない？ ホント？ じゃ何？ ケロシン？ それ何？ 灯油みたいなの？ ストープに使うやつ？ ガソリンと同じじゃん。なら問題なし。じゃなくて、問題あり。使っちゃダメなのよね、石油。地球を守るために。わかった？ わかってるって？ あら。』

相変わらず、ハイジャック犯は管制塔を無視して話している。BGMつきで。

「犯人が馬鹿だということ以外、さっぱりわからんな。」

呆れたようにハイデン氏が言う。

「操縦室の皆さんも大変ですなあ。」

すぐ他人事のように（他人なんだが）ハンニバルが呟き、香り高いコーヒーを一口啜った。

「おっ、このコーヒー、美味いですねえ。」

「うちから持ってきたコーヒーじゃ。ドイツ風焙煎たそうじゃよ、うちの言うには。」

「ほう。こりゃ癖になりそうだ。」

旧式通信機（無線傍受機）の前で、葉巻の煙を燻らせながら、すっかりゆっくりしているご老体二名。リビングには未だシートが干してあるが、この部屋では喫煙も可だ。少なくとも、禁煙だとは言われていない。

コングはハイデンさんちでベランダ修復の作業中。マードックはアントワネットさん宅でパッチワーク&掃除。フェイスマンはまだ就寝中らしいです。

何とも有意義っぽく爽やかな冬の午前。太陽はぼかぼかと暖かく、人々はそれぞれの仕事に勤しんでいる。『ともかく、飛行機も自動車もダメなの。ね？ 工場も

ダメ。あとね、石油掘ってるとかでガス燃やしてるでしょ。あれもダメ。石油掘ること自体ダメ。わかる？ あ、よかった、わかってくれる。おー、いいねいいね。……何？ わかっても無理って？ 無理じゃないって。だってほら、昔の人は石油なしでも大丈夫だったし。昔とは違う？ うん、そうだけど、やってみなきゃわからないじゃん。やつてみようよ、っていうのが僕たちの要求なのね。でね、要求を飲んでもらおうと思っただけでハイジャックしてるわけで。仲間が何人か？ ええとね、一、二、でしょ、三、四、五、と、六、七、七人。多いでしょ。まだまだいるんだけど、何？ 装備？ ダイナマイトとライターとプラスチック爆弾。それがさ、信管忘れちゃって。それから、竹串とナイフ。金属は持ってこれないからさ、ナイフは金属じゃないやつね。あと、木槌。痛いよ、これ。あ、あれ？ どうしたの？ 僕、叩いてないよ。何で寝ちゃうの？ ねえ、ちよつとちよつと、みんなどうしちゃったのよ？』

「……何だ？ どうしたんだ？」

ハンニバルとハイデン氏は、顔を無線機に向けた。

機内がすっかりと静まり、ステイック糊様ガスボンベの「シュー」という音も収まった。

ストコドッコイが立ち上がったので、キンケイド氏も続いて立ち上がった。パチンコを手に操縦室に向かっっていくストコドッコイの後ろについて行こうとしたキンケイド氏は、思い出してワゴンのストッパーを外し、引き摺っていった。静まった通路をそろりそろりと歩いていく、ストコドッコイ、キンケイド氏、ワゴン。

操縦室の前まで辿りつき、開けっ放しの扉を見てストコドッコイがニヤリと笑ったのが、キンケイド氏にも見えた。そつと中を覗く。

パイロットもコ・パイも、みんな突っ伏している。それでも飛んでいられるのは、オートパイロットのおかげだろう（別にビニール製の人形が操縦しているわけではない）。通信機のヘッドマイクを頭に、ハイジャック犯（と思しき人物）だけがすくと立っている。片手に木槌、もう片手にマイクロカセットレコーダー、心にマザー・アース、背中に地球（のプリントが入ったジャケッ

ト）。幸い、こちらには気づいていない。

ストコドッコイは犯人（と思しき人物）に向けてパチンコを撃った。弾は見事、犯人（以下略）のこめかみに当たり、頭をガクンと揺らしたかと思うと、犯人はばったりと倒れた。

倒れた犯人に駆け寄り、ストコドッコイは辺りを見回したが、目的のものが見つからなかったのか、頭を横に振り、犯人のベルトを外し始めた。そのベルトで、犯人の手を縛る。

それからストコドッコイは時計を見て、靴（マスク）を顔から外した。

「もうガスは大丈夫。」

キンケイド氏も靴を顔から外した。靴はストコドッコイに返す。それを受け取り、ロシア人は両足に靴を履いた。

と、その時。

「リ、リーダー……。」

客室にいた犯人の一人がよろよろと操縦室に向かってきた。催眠ガスの効きが甘かったのだろう。

キンケイド氏は咄嗟にワゴンを蹴飛ばした。犯人に突進していくワゴン。

ドゴンッ！ ガツンッ！

見事、ワゴンは犯人を突き飛ばした上に轆き、ついでに顔面に強烈なアタック。鼻血を吹きながら気絶する犯人。

ストコドッコイに倣い、キンケイド氏も犯人のベルトを外して、その手を縛った。

「ハラショー、その調子。早いところ、犯人全員ふん縛っちゃおう。」

「はい！」

それからしばらく、二人は犯人を縛り上げるのに忙しく、オートパイロットモードでは着陸できない、と気づく余裕すらなかった。

一方、その頃、マンション一階のフリオ宅は別の意味で戦場と化していた。

生まれそうーそれは全てにおいて優先される緊急事態である。

ガブリエラはベッドの上で陣痛の波動攻撃と闘っており、それをサポートするマドモアゼル・アントワネットとキムも忙しかった。

「しつかり、ガブリエラ！ もう少しよ。」

珍しく真剣な表情で、キムがガブリエラの汗を拭きながら励ます。

いつもはかなり適当な仕事振りのキムだが、ここ一番という時になると、割と有能な看護師に変身するのだ。

だからこそ、クビにもならず市立病院に勤め続けている。しかし、本当に緊急事態にならないと、彼女はやる気を発揮しない。逆に、彼女が有能振りを発揮しているという事は、事態はかなり差し迫ったものだということだった。

ガブリエラの足元についていたマドモアゼル・アントワネットが舌打ちする。

「逆子だ。こりゃ難産になるよ。」

キムとマドモアゼル・アントワネットが顔を見合わせた時。

「ママ！」

ドアを勢いよく開けて、ユリア（とオリバー）が駆け込んできた。

「ユ、ユリア？」

思わず陣痛も忘れて顔を上げるガブリエラ。

キッチンで湯を沸かしていたマリアンも出てきて、放蕩息子を見るなり雷を落とした。

「オリバー！ あんた一体どこに行ってたの！」

「お説教は後よっ！ それどころじゃないでしょ。」

珍しくもキムがマリアンに見る。

敢然と立ち上がったユリアは、まず後ろにいたオリバーを部屋から追い出した。

「さっ、男の子は外に出ててちょうだい。全く気が利かないったらー！」

締め出されたオリバーは、そこにいたフリオと共に、しょんぼり、いらいらと待つことしかできなくなった。

ドアをボタンと閉めたユリアは、マドモアゼル・アントワネットの前に進み、きっぱりと言った。

「私も手伝います。だって、苦しんでいるのは私のママで、生まれてくるのは私の妹が弟なんですから。私にはその

義務と権利があるわ！」

年端も行かぬ少女の健気な発言に、室内の一同はいたく感激した。

「よし、それじゃキムと変わって。キムはこっちに回ってちょうだい。」

マドモアゼルの指示に、てきぱきと従う一同。

彼女たちのやる気は気力ゲージを振り切らんばかりに最高潮に達していた。

この場合、気力を振り絞る必要があるのはガブリエラだけなのだが、ガブリエラも新たな気力を奮い立たせたようだ。

そして。

ドアの前でフリオとオリバーが熊のようにうろろろと待つこと四十五分。

静まり返ったマンションに、赤ん坊の泣き声が響き渡った。

どこかで赤ん坊の泣き声が聞こえた。

『夢？……夢か。夢だよね……』

フェイスマンは、まだ半分眠った頭のままでそう断定した。右に一度寝返りを打ち、体からずり落ちかけていた毛布を引き寄せて、再度くるまった。

『もうちよつと、もう、ちよつとだけ寝かして……』

そして二時間が経過。

フェイスマンは、唐突に目を覚ました。そして、毎朝目を覚ますたびに必ず思う一言、「ここ、どこだっけ？」を、間髪を入れずに自分に語りかける。

「ジェイソンの家。」

そう宣言し、自分の回答に満足すると、フェイスマンは急速に覚醒に向かった頭をボリボリと掻き、軽い身のこなしでベッドを下りた。部屋の隅とドアの側に分かれて取っ散らかっている靴を拾い、片足を突っ込んだところで、外の物音に気がついた。

ガンガン、ガンガン。

何かを叩く音が断続的に聞こえてくる。

「うるさいなあ、朝っぱらから。」

フェイスマンは腕時計を見た。

「……ちよつと寝すぎたかな。」

フェイスマンはそう言うと、ノロノロとリビングに向かった。リビングにハンニバルを探すも、そこには誰もいない。

「あれ、ハンニバルたち、どこ行っただろう？」

そう言いつつ、キッチンでヤカンを火にかけ、食後の皿やカップがそのままになっていたテーブルをテキパキと片づけ、テーブルを布巾で丁寧に拭いた。

食卓に着き、熱い紅茶を啜る。

ガンガン、ガンガン。

外からは、まだあの音が聞こえている。フェイスマンは、カップを手にベランダに出た。見下ろすと、キムの家の庭（ハイデンさんちの下）で、コングが大工仕事の真つ最中であった。その姿に、急に今現在の使命を思い出すフェイスマン。

「そうだ、仕事、仕事しなきゃ。」

うわ言のようにそう呟くと、室内に取って返し、カップを置いて足早に部屋を出、玄関の鍵をかけるのをすっかり忘れたまま、いずこかへ去っていった。

歩道脇に放置されているベンチに、スタングは座っていた。手足を放り出し、空を見上げて。そうして彼は、五本目の煙草に火を点けた。

と、その時、ヴォルフのバンが戻ってきた。ゆつくりとスタングの前に停まる。

「生まれたのか？」

「さあてね。俺ア奴らを門のところで送っていっただけだからな。」

ヴォルフが車の窓からスタングの方に手を伸ばした。スタングはベンチから立ち上がり、その手に煙草を差し出す。ヴォルフは煙草を受け取り、煙を深々と吸い込んで、しばらくしてから薄くなった煙を吐き出した。

「スパシーボ。お前、暇なんだろう？」

そう言って、煙草をスタングに返す。

「ああ。午後四時にや親分を迎えに行かなきゃなんねえけどな。」

「ハイジャックされた飛行機が定時に到着すると思うか？」

「親分が乗ってたから、早めに到着するんじゃないかねえ

か？」

「言えてる。ま、それまでは暇なんだろう？」

「まあな。」

「じゃ、測量手伝ってくれ。一人で測量すんの、大変なんだよ。」

「そんぐらい知ってるさ。昨日の晩、俺も一人で測量しようとしたからな。お前がどっか行っちゃまって間に。」

「悪い、カードやってた。」

「まあ天性懲りもなく負けに行ってたのか。」

「いや、昨日は珍しく勝ったぞ。」

「じゃ、測量手伝ってやるから、その代わりに、昼は奢れよ。」

「おう、わかった。」

「てーか、俺、朝飯も食ってねえよ。」

「実は俺もだ。ナターシャのピロシキ食いに行くか？」

「お、いいね！」

早速、スタングはバンの助手席に乗り込んだ。

「註／ナターシャのピロシキ屋は、マラガ・コーヴのところに出ている屋台である。ピロシキは、冷めてはいるが、不味くはない。」

静まり返った飛行機の中で、乗客のいびきと寝息だけが響き渡っていた。

キンケイド氏とスットコドッコイは既に犯人らしき人物全員を縛り終え、彼らを一箇所にまとめ、ワゴンの上の備品を元通りにし、トイレにトイレットペーパーを補充した。

「連絡しないでいいんでしょうかね？」

勤め人のキンケイド氏は、気になって、スットコドッコイに尋ねた。

「多分、連絡した方がいいよね、管制塔に。君、連絡してくれる？ 僕さあ、こういうことに関与したとなると、ちよっとまずいんだよね。ロシアン・マフィアだから。」

「マフィア？」

キンケイド氏は声を引つ繰り返した。マフィアなんて、映画とテレビの中になにか存在しないものだと思っただもんで。あと、シチリア島とコルシカ島とシカゴと中国と日本にもいるらしい。少なくとも、飛行機の中には

いないはず。それが、キンケイド氏にとっての「マフィア」。

「マフィアって、あの、抗争したり血で血を洗ったりするやつですよ？」

「うん、まあ、そんな感じかな。」

「……そうですか。」

それなら、飛行機の中でバチンコを持っていたりナイフを持っていたり催眠ガスを持っていたりしても、不思議はない。ちよっと納得してしまうキンケイド氏。

「表向きはリゾート開発してるから、いい物件見つけたら教えて。これ、名刺。」

と、スットコドッコイはネームカードをキンケイド氏に渡した。

「これはどうもご丁寧に。」

自分のネームカードをスットコドッコイに渡すキンケイド氏。さすがビジネスマン。

「石油会社の人なんだ。エリートだね。」

「いや、それほどでも。」

「ハイジャック犯を退治したとなったら、会社でも表彰されるかもしれないよ。やったじゃん。正義のヒーローだよ。」

「いやあ、ははは。」

「つてわけで、連絡よろしく。」

乗せられて、キンケイド氏はコクピットに向かわざるを得なくなった。

「……通信機の使い方、わかるんだろうか……？」

それが彼の今一番の不安要素であった。

コクピットで、マイクつきヘッドホンを見つけ、眠っているパイロットたちを見下ろしながら、キンケイド氏はそれを頭に装着した。ヘッドホンから、人の声が聞こえる。

『どうしたんだ？ 聞こえてるか？』

「あー、聞こえてます。えー、何から話したらいいでしょう？」

『君は？ さっきのハイジャック犯か？』

「いいえ、とんでもない、私はハイジャック犯ではありません。たまたまこの飛行機に乗り合わせた者で、ブラアン・キンケイドと言います。アメリカ人です。」

『そうか、キンケイド君。ハイジャック犯はどうした？』

『縛ってあります。』

『撃退したのか？ 君が？』

『撃退と言っか、まあ、何と言っか、ええ。』

『パイロットはどうした？』

『寝てます。』

『無事なのか？』

『無事かどうかはわかりませんが、今のところ寝てます。』

『なるほど、寝ているんだな。』

『そうです。』

妙な間があった。

『キンケイド君、君は寝ていないのかな？』

「ええ、だから、こうやって報告しているんです。寝ていたら、報告できません。」

キンケイド氏自身も、「おかしなことを話しているなあ」と薄々気づいていた。

『君以外のあと誰が起きてるんだ？ そして、どうしてパイロットは寝ているんだ？』

キンケイド氏は後ろを振り返った。ドアのところ、スットコドッコイが「僕のことと言っか、いや」と囁いた。思いきり「X」のジェスチャーをして。

「起きてるのは、私だけです。あとはみんな寝ています。なぜ寝ているのかは……これは推測でしかありませんが、犯人が催眠ガスを使っただんじやないかと思っか、私だけ、犯人が名乗りを上げた頃からずっとトイレにいたもので。」

『トイレに隠れてたのか。』

「隠れていたわけではなくて、紙がなかったの、出るに連れなかつただけです。しばらくして、ハイジャック犯たちの叫ぶ声がしなくなったので、出てきてみたら、みんな寝ていました。それで、ハイジャック犯らしき人たちを縛ってました。」

『犯人は七人ほどいるらしいぞ。数えてみてくれ。』

「七人？ 席に着いていなかった人たちを全員縛りましたが、全部で、ええと、十一人いましたよ。全員、背中に地球の写真がプリントされた服を着ています。」

『じゃあ十一人が正解なんだろう。』

「だと思えます。もしくは、それ以上か。念のため、これから乗客全員の背中をチェックします。」

『そうしてくれ。それから……。』

「何ですか？」

『パイロットはいつ起きると思うかね？』

「……わかりません。」

『今のところはオートパイロットで飛んでいるようだが、着陸の時は手動でなければならぬ。パイロットがコ・パイがそれまでに起きてくれれば問題はないんだが、万が一の場合、君に操縦してもらうことになる。』

「私が？」

『君、操縦経験は？』

『ヘリコプターなら操縦できます。』

『へりとは違うよ、これは。』

「わかっています。暗に、旅客機の操縦経験はない、と言ったまでです。」

『それは失礼した。では、キンケイド君、あと、そうだな、六時間以内にパイロットを起こすよう、尽力してみてください。』

「何とかします。」

『こちら最悪の事態に備えての準備はしておく。また何か進展があったら連絡してくれ。』

「はい、わかりました。」

通信が切れたのかどうかかわからないし、通信をどうやって切ればいいのかもわからないので、キンケイド氏はヘッドホンを外してパイロットの頭につけた。

「ご苦労！」

満面の笑みでキンケイド氏の肩に手を置くストコドッコイ。キンケイド氏も釣られて微笑んだ。ただし、疲れた笑み。

「催眠ガスで寝た人たち、六時間以内に起きますかね？」

「さあどうだろ？ 実際に使ったの、初めてだし。」

「もしパイロットが起きなかった場合、我々だけでこの飛行機を着陸させなければならぬそうです。」

「そうか、そうなるよね。うん、何とかするよ。じゃ、それまでに、ガスボンベに犯人の指紋をつけて、パチンコを別の犯人の手に握らせて、ポケットに弾入れて、さ

つき渡したナイフは使っていないよね？」

「ええ、全く。」

「じゃあそれは僕がしまつとく。」

「あと、乗客全員の背中を調べて下さい。地球の写真が背中にプリントされている服を着ていたら、それもハイジャック犯の一味です。」

「OK。」

着陸の件については何とかかなりそうだけど、すべきことと目白押しな二人であった。

ストコドッコイとキンケイドが、眠り込んでいる乗客を一人一人裏返して背中をチェックするという肉体的労働に取りかかった頃。

マンション屋上に移動して通信傍受に勤しんでいたハンニバルとマードックとミスター・ハイデンは、顔を見合わせていた。

「ハイジャック犯は捕まったようだな。」

なぜかちよつと残念そうなハンニバル。ここは安心するところじゃないのかね。

「ところで、今の無線だが、飛行機で喋ってた男は何と名乗っていたかね？」

「何が引つかかっているらしいミスター・ハイデン。」

「キンケイドって言ったぜ。ブライアン・キンケイド。」

マードックの回答に、首を傾げて考え込む。

「キンケイド、キンケイド……はて、どこかで聞いたことがあるような、ないような……。」

ご近所の名前くらい、覚えておこうよ、ミスター。ま、仕方ないか。どうせご近所づき合いか、マンションの自治会とか、奥さん任せだもんね。

「そう言われると、なーんか聞き覚えがあるような気がするかも。そんな知り合いか有名な人いたっけ？」

マードックがハンニバルを見上げると、ハンニバルは葉巻を銜えたまま、肩を竦めた。実は二人とも、仕事の依頼リストに確かにその苗字を見てはいるのだ。オリバーもAチーム四人の前でフルネームを名乗ったし。だが、何しろマンションの全世帯からの依頼の数は膨大で、それぞれのフルネームなんて、覚えていられるわけもない。

「とにかくだ。」

葉巻を持ち替えたハンニバルが重々しく言った。

「管制塔でも言ってみたろう。パイロットもコ・パイも夢の中だとすると、一番の問題は着陸だ。」

「そりゃキンケイドが誰か起こすんじゃないの？」

「そうだろうとも。それに、管制塔でも準備すると言ってたぞ。」

ミスター・ハイデンは最早、事件はすっかり解決、の気分になっているらしい。

「まあ、そっちはそうかもしれないが、何か匂わんか？」

「催眠ガスのこと？」

マードックの回答に、ハンニバルは教師然として頷く。

「催眠ガスをハイジャック犯が機内に撒くことに、何らメリットはないと思わないか？ しかも、自分たちでガスを撒くのに、マスクもつけずにいるわけがない。」

「自分たちも寝ちまつちゃ、世話ないのう。ま、先ほどの無線を聞いた限りじゃ、かなりの馬鹿であることは確かじゃが。カッカッカ。」

ミスター・ハイデン、そこは笑うとこじゃありませんから。

「それじゃ、ハイジャック犯の他に、催眠ガスを撒いた奴がいるってことになるじゃん。」

マードックの指摘に、ハンニバルはこやかに言った。

「正解だ。これは面白くなってきましたよ。」

ハンニバルの中では、未だ事件は終わってはいないと、言うか、これからもう一波乱ありそうな気配なのである。

ナターシャのピロシキは、今日に限って熱かった。それが不幸の始まりであったことなど、この段階では彼女にとって知る由もなかった。

というわけで、熱い挽肉と揚げ立ての皮とで舌と上顎をしこたま火傷した彼らは、食前より少し不機嫌になってマンション前へと戻ってきた。

「痛え。上顎、完全に皮が捲れちゃったぜ。」

と、ヴォルフ。

「一体全体どうして今日のナターシャのピロシキはあんなに熱かったんだ？」

「新しいフライヤーを導入したとか言ってなかったか？」

「新製品を買ったから使ってみたかったんだな、きつとしかし、このまま測量に入るのはちょっと辛かねえか？その、上顎が痛い、って意味で。」

「そうだな、何か冷たいもんが飲みてえな。ナターシャの店にあるドリンクと言ったら、ウオトカとウオトカとウオトカくらいだったからな。」

「どっかの家でソーダの一杯も貰うか。そうだ、今朝送ったたガキんとこなら頼みやすいんじゃないか？」

「そうしよう。」

意見が一致した二人は、足早にマンションに入っていた。入口で擦れ違った寝惚け顔の優男に軽く会釈をし、そのまま廊下へ。

「で、どこなんだ、そのガキの家は。」

「わからねえ。だから、門まで送っただけなんだって。」

「けど小せえマンションだから、住人の顔を確認がてら一回りすりゃ、すぐに見つかんじゃねえか？」

「早くしてくれよ。俺の上顎が持たん。」

というわけで、まずは上から、と二階の廊下へと歩を進める部下二人。

「ここにしよう。」

と、適当にヴォルフが選んだのは、ジェイソンの家だった。

無線を傍受しながらパッチワークをするのに飽きたマードックは、一旦ジェイソン宅へ戻ろうとした。昼食の下拵えをするために。だがしかし、材料がないのに気づき、ジェイソン宅のドアノブに手をかける前に方向転換し、ハイデンさんちへお邪魔することにした。そして、ミセス・ハイデンと昼食の打ち合わせ。二人してパッチワークをしながら。

討論の結果、昼食には、最近エスニック料理に凝り始めたミセス・ハイデンが、腕によりをかけてナシゴレンを振る舞ってくれることになったので、マードックはミラー氏の話の伺いに、一階入口脇に移動した。

ミラー氏は、朝食会でマスナン爺さんと共に体操していた男だったのだが、その時、マードックは調理に忙し

かったので、そんなことは知る由もなく、ミラー氏とてこのパッチワークを抱えた男が朝食を作っていたなんぞ知る由もなかった。そんなわけで、最初の挨拶は「始めまして」。

「ジェイソンの代理なんだけどき。」

ちくちくちくちく。

「ミラーです。」

簡単すぎる自己紹介の間、ミラー氏はマードックの手許から目が離せなかった。

「どうしてこの男はパッチワークをしているんだろう？ それも、手元を見ずに……。」

「迷子のペットを探してるって？」

ちくちくちくちく。

「え、ええ、そうなんです。」

「犬？ 猫？ 鳥？ それとも、アライグマ？」

「カメです。ミドリガメ。生まれてまだ間もないのに、水槽を抜け出してどこかへ行ってしまつて……。あ、どうぞ、中へ。」

玄関先での立ち話だったのに気づいて、ミラー氏はマードックを奥へと導いた。

「今、仕事中だったもので、散らかっていて申し訳ないんですが……。」

そう言い置いて、氏はリビングへ続くドアを開けた。

その途端、マードックの手が止まる。

「キャプテン・ロンパースだ！」

「ご存知ですか。」

デスクに駆け寄りマードックを見て、ミラー氏は嬉しそうに言った。そう、ミラー氏は、今一部でのみ有名なコミック、『キャプテン・ロンパース』を描いているコミック・アーティストなのであった。

「原稿には触らないで下さいね。」

「わかってるって。何、キャプテン・ロンパースとパンパースが合流するわけ？」

マードックがデスクの上のカラー原稿を興奮気味に見つめて問う。

「そうです。今描いているのが発売されるのは、二カ月ほど後になりますけどね。書店に出ている最新号は、ジョッパーズを復活させようとしたキャプテンがオーブ

ン・ザ・ウィンドウで異空間に飛ばされる辺りでしたっけ？」

「それは先週。今週のは、パンパースがジョッパーズのソウルをハウスして、閉じかけたループの中に投げ入れたのはいいけど、スリッパーズが裏切つてデルタ・フィールドのバランスが崩れちゃつた、ってとこ。」

「その話もう出たんですか。ちょっと難しかったですよ、あの話。」

「難しかったってーか、スリッパーズが何でスカラベのエニグマを解明してたのが、やつとここでわかつて、すっきりした。」

「わかりましたか、あんな前の話。」

「モチのロンよ！」

と、二人は二人にしかわからない話で盛り上がりつた。パッチワークのことも、カメのことも忘れて。

その頃、コングはコングリを流す土台の足場を作るのに四苦八苦していた。

ピンポーン。

ヴォルフはドアチャイムを鳴らし、襟を正して応答を待った。彼の後ろではスタングが、やはり衣類の埃を叩き、背筋をぴんと伸ばしている。

よそ様のお宅を訪問する際は礼儀止しく。

それがボス、スットコドッコイによって厳しく叩き込まれた躰なのだ。ロシアン・マフィアの戒律はイスラム教並みに厳しい。

「どなた？」

パタパタという足音と共にジェイソン宅のドアを開けたのは、ミセス・ハイデンだった。

マードックと打ち合わせを終えた彼女は、昼食の時間に合わせてナシゴレンを作るために、こちらに来ていたのである。なので、この部屋の本来の住人というわけではないのだが、エプロンをつけ、フライ返しを片手に出てこれたのは、訪問者にそんな判別ができるわけではない。「何のご用かしら？ 新聞なら間に合ってますよ。」

「いや、新聞の勧誘じゃなくて。」

「じゃあ、牛乳配達？」

「それも違います。」

「宗教の勧誘は、絶対にお断りよ。」

ミセス・ハイデンの先制攻撃を受けたヴォルフは、すっかりしどろもどろになってしまった。が、勇気を振り絞って口を開く。

「あの、実はですね、このマンションに住んでる男の子を捜しているんですけど。」

「男の子？ それだけじゃわからないわねえ。」

ミセス・ハイデンは考え深げにフライ返しを振った。

このマンションの住人で「男の子」という呼称に当てはまるのと言え、ヤンソン家の兄弟と、オリバーだ。

「七、八才で、髪はブロンド、目はブラウンの。」

「それならオリバーね。一階の一〇七号室ですよ。」

そう言うなり、ミセス・ハイデンはさっさとドアを開めようとした。彼女は忙しいのだ。何しろ、お昼までに十分以上のナシゴレンを用意しなくてはならないのだから。

「あ、ちょっと！ ついでに済ませません。」

上顎の痛みに耐えられなくなったスタングが叫んだ。

「まだ何かご用なの？」

「申し訳ないんですが、冷たいソーダを一杯、分けちゃもらえませんかねえ。ちょっと口ん中を火傷したもんだ。」

スタングの訴えに、ミセス・ハイデンは大袈裟に叫んだ。

「まあ、それはお気の毒に！ 私もつい先日、蒸かし立てのあんまんで同じ目に遭いましたの。あれは本当に辛い体験でしたわ。さ、どうぞ、お入りになって。」

同情溢れるミセス・ハイデンの招待を、スタングとヴォルフはありがたく受けることにした。これがさらなる悲劇を呼び込むことになるのは、その時の二人は全く気がついていなかった。

ミセス・ハイデンは冷蔵庫を開けた。彼女の家の冷蔵庫には、ソーダなんてものは入っていないのだが（あるのはビールのみ。だって、ハイデン夫妻、ドイツ人ですもの）、ここはジェイソンの家。そして、この冷蔵庫はジェイソンのもの。ソーダの一つや二つ、アメリカ人なら絶対冷蔵庫に備えているものだ。そう、ミセス・ハイデンは確信していた。

そして、彼女の思惑通り、冷蔵庫の中にはちょうど二本のソーダと思しき缶が入っていた。緑色の缶に、青い文字で「ファムタ」と書いてある。その他にも、小さい文字で「ポカポローラ・カンパニーの製品」と書いてある。彼女は知っていた——ポカポローラ・カンパニーは、あの有名な炭酸飲料、ポカポローラを出している会社だ。ということは、この缶の自身は炭酸飲料だろう。

ミセス・ハイデンはドイツ人ではあるが、英語は堪能であった。しかし、ここで「炭酸飲料だろう」と断定できずに推測しているのはなぜかと言うと、この缶に書かれている文字の大半が、英語でもドイツ語でもないから。彼女が察するに、アジアのどこかの国の文字であろう。

「何だか怪しいわ、これ。」

そうミセス・ハイデンは、キッチンで一人、呟いた。

怪しかろうが何であろうが、あと冷蔵庫に入っている飲み物と言え、牛乳と牛乳と牛乳、以上。ソーダを欲している二人の客人にサーヴできるのは、この怪しいファムタより他にあり得ない。

ふと時計を見ると、先刻洗ったライスの吸水が終わる時刻だった。これからライスを茹でねばならぬのに、大鍋に湯を沸かすのを忘れていたミセス・ハイデンであった。（米は茹でずに炊け、という意見は却下します。）

一旦、缶をキッチンの作業台に置いて、ミセス・ハイデンは大鍋に水を汲んだ。水を火にかけてからソーダを出しに行った方が、時間の節約になるだろうので。

「よっこらしょ。」

大鍋の八分目まで水を入れ、彼女は鍋を流しから持ち上げた。かなり重い。坊や（マードック）は軽々と持っていたのに。

ガンゴン、ドガドガッ！

重い音を立てて、床に何か落ちた。先ほど作業台に置いた缶二本である。鍋にぶつかって落ちたのだ。

「あらあら。」

大鍋をガスコンロの上に置き、火を点けたミセス・ハイデンは、缶を拾い上げた。汚れていないか確認。大丈夫、問題なし。

とりあえず、彼女は缶二本を持って、リビングで待つ

二人のところへ行き、缶を渡すと、グラスと水が必要かしら、と再度キッチンへ戻った。

「ここ、さっき来たところだぜ。」

リビングに通され、ミセス・ハイデンがキッチンに消えると、リビングを見回してスタングが言った。

「何しに？」

気づくの遅えよ、といった顔で、ヴォルフが尋ねる。

「空港行くのに乗ったタクシーの運転ちゃんについてたら、ここに来て……。」

「ってこたア、ここはその運ちゃんか？」

「いや、そうじゃねえと思う。やたら人がいて、飯食ってたし。」

「じゃ食堂か？」

「そんな感じかな。じゃなけりゃ、集会場か。」

「そんな話をしてるところへ、賄いのオバサンか。」

そんな話をしてきているところへ、賄いのオバサンがソーダを二本持ってきてくれた。何だかわからない、初めて見るソーダだが、今はスイカソーダだろうと何だろうと飲める気がする二人であった。

賄いのオバサンに礼を言い、二人はブルタブを引いた。

プシュシュシュシュシュシュ！ ジョビジョビジョビジョビ。

「うわっ！」

ソーダは猛烈な勢いで噴出した。合成のメロンの香りを振り撒きながら。

「あー……。」

噴出が終わった後、二人は互いの姿を、そしてリビングのあれこれを見やった。

スタングとヴォルフのシャツ、緑色。干してあったシャツ、緑色。段ボール箱の中の、花の形をした紙、緑色。別の段ボール箱の中の、白い封筒、緑色。白木のフロアリングの床、緑色。二人の周囲にあった、ほとんどのものが、メロンソーダの明るい緑色に染まっていた。

遅れ馳せながらグラスと氷を持ってきた賄いのオバサンが、目を点にして二人の方を見ている。

スタングとヴォルフ、二人はマフィアの一味ではあるが、根っからの悪者ではない。なぜなら、彼らはこの場

から逃げなかったからだ。逃げようと思えば、いくらでも逃げられた。でも、そこにいた。「どうしよう」と思いつながら。

「どうしよう」に拍車をかけるように、賄いのオバサンが二人にポツリと言った。

「そのソーダね、飲んじゃいけなかったみたい。」

彼女が掲げたものは、冷蔵庫の中に今し方見つけた、一枚の紙。それには、こう記されていた。

『オイラのだから、ファミタ飲んじゃダメ！ マードック』

その頃、マードックは、ミラーさん宅でキャプテン・ロンパスについてさんざん語り合った後、喉をカラカラにしてカメを探していた。「帰ったら、冷たいファミタ飲もうつと。ナシゴレンとメロンソーダ、ナイス・マツチングだよなあ」などと思いつながら。

その頃、ハンニバルとハイデン氏は引き続き屋上に無線傍受に勤しんでいた。ハンニバルは、ここ数日の辛く地味な3K仕事に退屈していたし（体は疲れていたが）、ハイデン氏は、家庭的な妻との日常に少々飽き気味だったので、このハイジャック事件は、よい息抜き（レジャー）と認識され、大いに楽しんでいたのだ。

「このキンケイドとかいう男が、実はハイジャック犯の仲間だって推理は成り立ちませんか。」

と、ハイデン氏。

「ほほう、伺いましょう。」

「操縦に不慣れな振りをして、何気なく自分たちの行きたい場所へと飛行機を誘導してるとはなかないかと、考えてみたんじゃないが。」

「ふむ。」

と、腕組みするハンニバル。暇潰しに状況をまとめてみたレポート用紙に目を落として、しばし考える。

「確かにユニークな発想だが、その作戦は時間のロスが多い。大体、この男の話つぶりの丁寧さからして、エコロジー団体の構成員と言うよりは、石油関係のビジネスマンか何かだろう。アブダビ発の便だしな。」

「確かに、口調は丁寧でしたな。……思い出さなぞ。い

やまさか。」

「思い出したって、何を？」

「キンケイドって名前の家、このマンションになかったじゃろうかと思ってるな。」

「キンケイド？ あったか、そんな家。」

「いや、あったぞ、確かキンケイドだった。ほれ、あの親子連れの旦那じゃよ。」

「親子連れって、マリアンとオリバーんところか？」

「そうそう、それじゃ。」

ハイデン氏は、嬉しそうにボンと膝を打った。

「ふう、これでもう安心よ。母子ともに健康。」

と、マドモワゼル・アントワネットは高らかに宣言し、それと同時に室内に暖かい拍手が起こった。

安らかに眠る我が子を傍らに、満足げに微笑むガブリエラ。ガブリエラの手を握って、感涙にむせぶフリオ。

そしてユリアは、この家族の記念日を写真に収めるべく、俄カメラマンとなり、フラッシュを焚きまくっている。

「さ、後片づけも終わったわ。みんな、ご苦労。」

台所から手を拭き拭き出てきたキムが偉そうに言い放った。

「もうしばらく、やることはないわね。ここで一旦解散にしましょう。」

マドモワゼルの言葉に、一同、労いの言葉をかけ合いつつ席を立つ。

「じゃあ、私たちは家に帰るわ。オリバーにたつぷりとお灸を据えてやらなきゃならないし。」

と、マリアン。その言葉にオリバーが、ふええ、と泣き声を上げた。

「あのおばさん、あんまり叱らないであげて下さい。オリバーは、私のためにいろいろしてくれました。悪いのは私なの。」

ユリアが、そう言って、オリバーの手を取った。

「いいんだ、ユリア。僕がしたくしたんだから。ユリアは悪くないよ。」

目尻に溜まった涙を拭いて、オリバーが雄々しくそう言った。本当は、母の雷は死ぬほど恐いのだが、恋は少年をほんの少し強くしたようだ。

「何言ってるの。二人とも同罪。さ、帰るわよ。」
マリアンは、そんな息子のカッコつけを女子をあっさり切り捨てると、名残を惜しむオリバーを引き摺って帰っていった。

【つづく】